説教余滴 2019 年 10 月 20 日、岡見さんありがとう、

前回 10 月 13 日付の余滴に間違いがありました。
衣笠病院法人専務理事のお名前、古屋修哉、と書きましたが正しくは　古屋修身(おさみ)です。謹んでお詫びして訂正いたします。

岡見さんは、大正 14 年（1925 年）に東京美術学校を卒業後、遠藤新建築創作所に入所します。その作品は、全期を通して、ライトや遠藤の影響が見られる作風と言われます。
遠藤の建築観を示す言葉があります。
「建築の参考書は唯一つある。旧約聖書創世記第一ページにある。
『神・・・をつくり、その各々と、その凡てを良しと観たまえり』をいふのである。」
《創作の一元》と題して遠藤新が記した『建築の日本』1924 所収の論文の一部です。

また、《地震と建築》（『婦人の友』1923, 10）では、地震で倒れない五重塔を針葉樹と比較し、樹木の成り立ちの自然さと共通する五重塔について論じています。その中で樹木を「最も美しい建築だ」と記します。自然界のあり方に学び、無理のない、不自然さのない、釣り合いの妙を建築に結び付けていることが知られます。日本建築の特徴を取り入れておられる、と感じ嬉しくなります。自然との調和、

　御殿場教会の古い礼拝堂を想いだします。
真夏にあの講壇に登った人だけが知ることです。クーラーのない時代の会堂、真夏ともなりますと、二階の戸障子もすべて開け放ちます。そして、講壇から二階を見上げると、窓の彼方に大きな富士山が見えました。どなたの設計か分かりません。町の大工さんじゃないか、との答えでした。古来の日本建築は、自然と一体化するのが当たり前のことだったのでしょう。御殿場東山荘の黙想館は、正面の窓一杯に富士山が広がり、見る人の心を癒してくれます。設計者は、早稲田大学工学部教授。「ぼくの一番のお気に入り」との事。

岡見作品は、細部にこだわり自然を含む全体の一体感を重んじます。